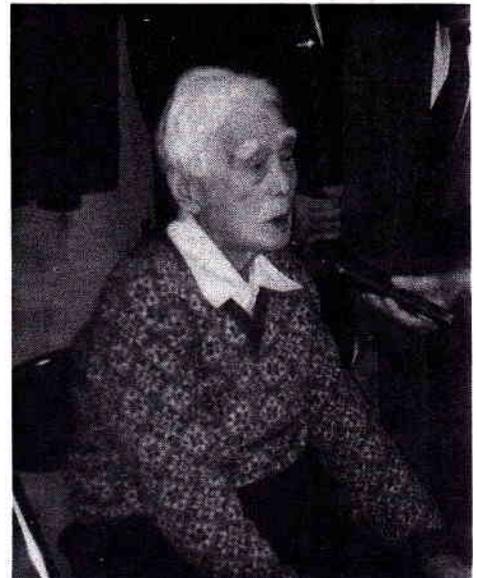


大井第一小学校

同窓会会報2号

大井第一小学校同窓会 2000年



安田さん（一〇三歳）同窓会総会にて

【校歌】

作詞 北條 誠
作曲 服部 正

1 陽がのぼる 陽がのぼる 希望の丘に 陽がのぼる
むらさきにおう 武蔵野の 南大井の 鹿島の町に
ああ われらの 大井第一

2 こころはひまわり こころはひまわり 東京湾の 波の音
はくはくはくはくはく 太平洋 海の子ははくはく 血をわらわら
ああ ぼくらの 大井第一

3 カガヤクよ カガヤクよ 遠くに仰ぐ 富士の山
千古不滅の 白雪の 清き姿は わたしの心
ああ わたしの 大井第一

4 わきおこる わきおこる 希望の歌が わきおこる
くめくつきせぬ 師の教え 知識の泉みなぎる力
ああ われらの 大井第一

「こぼれ話」

昭和四年卒

前同窓会会長 岡田 一郎

同窓会の会報第二号発行をお祝い
申し上げ、同時に会報委員会の諸君
の、御苦勞を感謝します。

編集氏より原稿依頼を受けました
が、期待に添える文章が書けないの
で、幾つかの「こぼれ話」を綴ります。

「校章」

私の父（明治十九年生、当時は四
年制）の時代は、ローマ字のOIS
を組み合わせたもので、当時近隣の
学校では、この様なハイカラな徽章
はどこにもなかったと、誇らしげに
話してくれた。

大正五年、小倉校長（第十代）の
時に、現在使われている、大を五つ
組み合わせた大井の校章に改められ
た。私の頃はブリキで金色に輝いて
いた。山中小学校（当初大井第二小）
は銀色であった。その為か我々は学
帽の校章が目立つようアゴ紐の上に
校章を乗せて、かぶっていたことを
思い出す。

「校歌」

開校が明治八年と古い歴史のわり
に校歌がなかったのは不思議なこと
で、父の頃は何か別の歌が唱われた
と聞いている。

昭和二十五年の開校七十五周年
に、葛生校長（第十四代）が校歌制
定を熱心に働きかけ、私達の同期北

条誠氏に作詞を依頼し、同氏の尽力
で知人の服部正氏に作曲して頂いた
ものである。

同年五月十五日、記念式典に初め
て校歌が披露され、同時に地域、同
窓生有志の募金で新調の校旗（二代
目）を私の手で葛生校長に手渡した
記憶がある。

「組の名称」

私の姉（大正十三年卒）の六年迄
は〇年一組、二組と呼稱されてい
た。私が同年四月入学した時は、松、
竹、梅、雪と組名が呼ばれた最初で
あると思う。

「卒業証書」

卒業証書でちよつと珍しいのは、
明治三十年、父の卒業証書には菊の
紋章が印刷され「村立大井尋常小学
校」となっている。十六弁の菊の紋
章のあるのは珍しいと思う。

大正期から終戦頃迄は証書の裏に
種痘完了、年月日が記載され、種痘
の必要性が伺えた。

「杜の哲学者像と作者」

みみずくの像の作者は伊東傀先生
であるが、昨秋、東京芸大美術館開
館を記念して「芸大美術館所蔵名品
展」を見に行つた折、彫刻の部に、
伊東先生の「青年の首」像が展示さ
れていた。母校の庭にも同先生の作
品があることは、母校の宝として後
輩に伝わることを念願する。

みみずくの像は同窓生の手で贈呈
して良かったという想いにふけて
いる。

品川区の通学区

ブロック化について

校長 兒玉 潔夫

品川区は、新しい二十一世紀の教育改革を進めていく「プラン21」を作成していますが、その中の一つの施策として「通学区の自由化」を打ち出しました。

学校改革の目的は「特色ある学校づくり」で、学校がそれぞれ特色ある学校になり、互いに切磋琢磨して良い意味での競争により教育を活性化することにあります。そして、そのためには「保護者にも選択の自由」をあたえるというものです。

このことにより、学校には、学校の個性を確立させるべき校長の役割、教職員の意識改革が求められます。また、保護者には、子どものために何を望み、何を選ぶかという、力量が試されるべきがいつに来た、と受け止めています。

その結果として、本校を選択した方々が多くいらつしやいましたが、その方々の選択の理由は千差万別です。

保護者の方は「選択の自由」を、学校は「個性化の自由」を手にしましたが、自由には責任が付きもので、保護者と学校は手を取り合っって一緒に本校の教育をよりよいものに創りあげていく責任を新たに負いました。

私たちは、次代を担う子どもたちの成長のために、全ての保護者の方々、地域の方々、同窓会の皆様と共に頑張っていくことを考えています。

このことに対しての、同窓各位の意見等をたくさんお寄せいただきと幸いです。

『杜の哲学者』に学ぶ

教頭 古澤 昇

本校には、開校百二十周年記念に同窓会より寄贈された木菟（みみずく）のブロンズ像『杜の哲学者』が、校庭の片隅で首をかしげながら、学校を見守っています。

このブロンズ像は、大一小の先輩の方々が、後輩の子どもたちに豊かな心が育つようにとの願いを託して寄贈していただいたものです。

その願いとは、①鹿島の杜の木菟が安心して巣くうような杜（環境）の再現を託す。②子どもたちの知性と学芸の育成を託す。③杜の哲学者として、学校や地域の平和と環境の維持を教職員・保護者・地域の方をはじめ子どもたちへも託す。三つです。

本校では、先輩方の願いに込め、三年前から「環境教育」に力を入れて取り組んでいます。『杜の哲学者』を先輩だと思つて、今後子どもたちにその思いを伝えていきます。

小学校の思い出

昭和十二年卒 菅野 昌義

私達は当時一学年が五組あった中で、唯一の男女組であったので、ずっと男女合同でクラス会を開いており、他の組の人から羨しがられている。そして一年の初めだけ園城寺先生、次いで吉川先生（現、深尾先生）、さらに浅沼先生と揃っていい先生に受け持つて頂いて感謝している。吉川先生はまだ先生になりたての若くてなかなか厳しい先生で、凄く魅力的であった。当時の私達の年齢では、先生と深尾先生とのロマンスについては、余り詳しくは知るよしもなかった。

私は運動神経に恵まれず、身体も弱くてよく学校を休んでいたため、今で言えば、いじめられっ子の資格十分だったが、そうしつこくいじめられた覚えはない。低学年では図工が得意でよく褒められ、品川区の展覧会に出させて頂いたり、高学年では算術が得意で、よく褒められ、自習時間に他の友達に教えてあげたことなど、懐かしく思い出す。

『春秋クラブ』について

昭和十三年卒 仁木 勇夫

我々大正生まれの同期生が嬉々として集まる会が二つあります。一つは隔年に開催される同期会で、今年八回目になります。もう一つは『春秋クラブ』という会で、いわば同期会の分科会の様なものです。ある時、二年に一回の同期会では挨拶と飲み食いだけで終わってしまうので、もっと実のある集まりの場を作つてほしい。」という提案がありました。そこで、所定の日時と場所に春夏秋冬一年に四回集まり、スピーチを通して各自の待っている体験や知識を分かちあい、その後は質疑応答や全員のトーク等、楽しく一時を過ごす事にしました。会費は千円。この会のお陰で、旧交が更に深まつて来ました。

第1回 「道祖神について」

戸川 浩

第2回 「ヒマラヤ登頂」

村田秀雄

第3回 「車いす生活」

柳谷直樹

第4回 「ベーターベン第九の合唱」

雨宮正彦

第5回 「いのちの電話」のボランティアに関して

佐々峰子

『子供同士の遊び』

昭和二十三年卒 星野 史郎

外に出歩いて見ると子供同士があれでいる風景を目にする事がなくなってきました。受験勉強か室内での遊びに興じているのであろうか。さて私達の世代はどうでしょうか。物資・教育の質・生活環境も現在とは大分違いました。子供の遊びに係があると思われず。車が少なく道路上の危険性もなく子供達は第一小学校の前の池上道路を我が物顔にローセキで路上に今日の遊びのルールを書き、そこへ後から後から仲間が増えて、次から次へと遊びの内容がかわり、日毎新しい試みをつくわえ、遊びの達人ができ、核となり、多くの子供達が年の差をこえて日々楽しく、面白く、時には泣いたり、怒ったり子供の世界が有りました。その後食料難を乗り越えた人達が現在に至り、今の子供達が造る未来が大きな楽しみでもあります。子供時代のいろいろな出来事を語りあえる同窓会は楽しみなものです。平和が続いて貰いたいものです。

集団疎開の思い出

昭和二十四年卒 彦坂 浩司

昭和二十年戦況は日増しに厳しくなり下町の大空襲などもあって、小学生は田舎の学校に疎開することになりました。縁故疎開と、知り合いの無い人は三年生以上を対象に、学童集団疎開が実施されました。当時三年生の私は、田舎もないことから最年少児童として、五年生を含め約五十名で南多摩日野町の善生寺の境内にある日野小学校豊田分教場に集団疎開しました。今にして思いますが、汽車に乗り遠い所に疎開したと思いましたが、豊田ですからさういぶん近くであったわけです。疎開当初は、近くの浅川に泳ぎにいったり、畑の草取りなどをした記憶があります。食料事情も悪くなり、衛生状態が悪かったためか風(シラミ)が発生して服の折り返しにしているのを取ったりで、今では考えられない事がありました。家の前の藤森様が当時の写真を撮って下さいまして神田、石川先生と当時の生徒が写っているのですが、お名前が分らず残念です。

「ある小さな感動」

昭和二十五年卒 椿 久雄

昨年神田の古本屋街を散策中、五十年振りにある本に再会した。ぼろぼろになりかけた大正十二年刊「大井町誌」である。大井第一尋常小学校と、鮫の頭骨の写真に確かな見覚えがあり、懐かしさと同時にある種の感動を覚え、しばらくの間見入っていた。五年生か六年生の時と思うが、その本は教室に持ち込まれ、この本を参考にして大井町の町名の由来を調べ、そして授業として、その所縁の場所を訪ね歩いた事が印象深くても思い出す。鹿島神社、倉田耕地、金塚(庚申塚) 滝王子稻荷と名前そのものから、北条、上杉が戦った太刀合原(立会川)、山中団九郎という盗賊がいた山中町、鮫が網にかかり腹の中から観音様が出た鮫洲、刑場があつた鈴が森等々。興味深い社会科だった。お寺か個人の家か忘れたが、座布団の上に大切に祀られていた鮫の頭骨を特別に見せてもらった事は今でも仲間達の語り草になっている。大井の由来はその時から守護職大井氏からきたもの

のだと思ひ込んでいたがそれは疑わしく、この地は荏草や藺が沢山植えられていたところで大藺が大井になったという事だと今回はじめて知った。

卒業までのわずか四年しか住まなかつた大井の町が、とても好きだ。それは、大井第一での生活が浜川小学校の借り家の二部授業から始まって待ち望んだ新しい校舎が出来、自分達の校庭で思い切り野球が出来た時の感激等々無邪気な一時代を過した事、そして恩師松崎濤子先生を囲みクラスメート達と今までずっと交流が続いているからと思う。

二〇〇〇年の春を迎え、卒業して丁度五十年になる。かつて歩いた所縁の場所をもう一度ゆっくりと散策したいと思っている。

ミレニアムに思う

昭和三十四年卒 高橋 和子
(長谷川)

私が第一小学校にお世話になったのは、もう四十年前の事になります。木造の校舎、木の机や椅子。校庭で元気に遊び回る私達を見守ってくれたヒマラヤ杉。大の苦手だった給食の脱脂粉乳や鯨の串カツ。運

動会で一日だけ履いた足袋や、校歌のダンスで最後に女子全員が手を繋いで作った校章。六年生の日光林間学校で大雨の中ずぶ濡れで引き返し、辿り着けなかった切込湖。湯の湖畔の花火大会の煌き等々どれもがセピア色の大切な思い出です。

当時は今程豊かではありませんでしたが、皆が目標を持って生活していた様に思います。最近のニュースは明るい事ばかりではありませんが、私達が百年早く生まれても、遅く生まれても、新世紀のページを開く時に巡り逢えなかったと思うと、ミレニアムは時の流れの中でふと立ち止まり振り返って、又新しい一步を踏み出す良い機会になったと思います。

団塊世代の小学校時代

昭和三十五年卒 萩原 滋

戦後ベビーブームの真っ只中に生を享けた私たちは、いつでも大勢の仲間に取り囲まれて育ってきた。大井第一小学校では、六十名近くのクラスが七つもあり、入学後しばらくは教室不足から午前と午後の二部授業になった。小人数、少クラスが一般的となった今の小学校に比べると、まさに隔世の観がある。生徒数が少ないと先生の目が行き届き、きめこまかい指導ができるとしても、

大勢の子どもたちが醸し出す活気は欠けてしまう。自分の小学校時代を振り返ると、何よりも「賑やかだった」という印象が強い。これからの高齢化社会で私たちの世代が若い人たちに過重な負担を強いることになるようだが、成長過程を通じて同年齢の仲間が大勢いたことは、むしろ幸せだったと今は感じている。

「むかし」

昭和四十三年卒 野添 裕

昭和四十三年四月 桜満開の大井第一小の校庭に貼り出された新一年生六組の中に自分の名前を母が見つけてくれるまでの不安。大きな桐の木の周りをぐるぐる回った運動会。友達ももらった鉛筆とノート。一緒に食べたお弁当。月曜日は全校朝礼。遅刻をする。と校庭の隅で待たされ(立たされ)た。横を見るといつものメンバー。南側の校舎を東側にジャッキを使って少しずつ少しずつ動かしていくのを教室の窓からボーっと見ていた。私の家の前の道は土で、敷石が敷いてあり、街灯は気がついた人が鉄製の柱の中にあるスイッチを入れたり切ったりしていた。西光寺の境内の椿の実で笛つくり。釘さし。ペーごま。チェーンリング。学校から帰ると玄関にランドセルを放り

出して「ただいま!」「いつてきます!」「どこいくの?」は今でも変わらないのか。百二十五年間ずつと子どもたちを見てきた大井第一。これからも元気な子どもたちを「よろしく!」

木造から鉄筋へ

昭和四十六年卒 小林 昌信

東京オリンピックピックの次の年に入学、大阪万国博覧会の次の年に卒業というのが私達昭和四十六年卒業組です。入学当時は木造校舎のほうが多く、冬はコークスのストープで前の席が熱く、後ろの席はすきま風で寒い思いをしていました。コークス運びの係になったりすると、その重さで大変な思いをしたのですが、休み時間にストープを囲んで話をしたり給食の時間にパンを焼いたり、楽しい思い出もたくさんあります。入学してしばらくすると鉄筋校舎への建て替えが始まり、プレハブの校舎や講堂(体育館)で授業が行われました。私のクラスは講堂の中の仮教室となりましたが、これはベニアで周りを囲っただけで天井はなく、暖かい空気は全部逃げてしまいい、とても寒い思いをしました。校舎は木造から鉄筋へと時代は変わりましたが、今でも思い出すのが入学式、卒業式と記念写真を撮った藤

棚、これからも多くの卒業生を見送ることでしょう。変わらぬ藤棚、そして松組、竹組、梅組…のクラスの名称、大井第一小学校の卒業生でよかったと思います。

アスファルトから土へ

昭和六十二年卒 上野 大二郎

私が大井第一小学校に転入してきたのは、一年生の秋でした。石川県の小学校からきた私にとって大井第一小学校は都会的な学校でした。何よりも印象深かったのがアスファルトの校庭です。石川県で畑や空き地、土の校庭で遊んでいた私には、まさに驚きの一言に尽き、転んだ時のその痛さは土の上とは比べものになりませんでした。まもなく、その校庭も土のグラウンドとなり、サッカークラブにいた私は裸足でボールを追いかけていたことを思い出します。今、時折通りかかった時に見る校庭は、以前と比べるとずいぶん狭く感じますが、その頃は広くて、休み時間に校庭で遊んでいると授業に遅れてしまうこともしばしばでした。その他にも、稲刈り、プールでの魚釣り等、まさに《汲めど尽きせぬ》思いが胸にあふれ、懐しく思い出されます。

第二回 同窓会総会記録

平成十一年四月一七日（土）

PM 2:00 ~ 3:00

於／大井第一小学校 視聴覚室

出席者総数／約五十名

議長／浅野氏
司会／津田氏

1、現校長挨拶

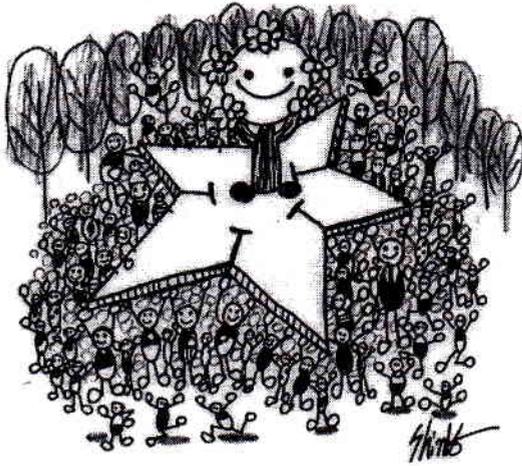
・平素は同窓会の方々いろいろなお世話になり感謝。
・大井第一小学校は、現在も区内では児童数が一番多く教職員も力をあわせて伝統ある学校として頑張っている。

2、同窓会長挨拶（浅野氏）

・皆さんの御協力により、同窓会も着々とまとまりが出来、二年に一度の総会を迎えた。これからも同窓会発展のため、よろしくお願したい。

3、議事

- ①、事業報告の件（森氏）
別紙プリントによる説明。
- ②、会計報告（宮内氏）
別紙プリントによる説明。



③、会計監査の報告（小林氏）

適正に処理されていた。

④、事業計画について（森氏）

別紙プリントによる説明。

⑤、予算案について（宮内氏）

別紙プリントによる説明。

⑥、役員改選・会則改正（松林氏）

今回は特に改正はしない。

⑦、安田弥太郎氏

（明治三十年生満一〇三才）

大先輩の安田氏は車椅子で途中から出席され挨拶された。

同窓会からは長寿のお祝として花束を贈呈した。

（総会の雰囲気が大層なご）

平成10年度 収支報告（H10年4月1日～H11年3月31日）

収 入		支 出	
9年度より繰越	1,028,337	同窓会報・学校案内及び宛名シール 印刷	593,685
会費入金	745,254	封筒・振込票 印刷	80,324
寄付金	13,000	同窓会報等 発送費用	466,760
名簿売上代	1,500	通信費	16,280
10年度卒業生入会金	34,200	会費振込手数料	21,360
預金利息	225	文具費	579
		雑費	65,360
		11年度へ繰越	578,168
計	1,822,516	計	1,822,516

平成11年度 収支中間報告（H11年4月1日～H12年1月15日）

収 入		支 出	
10年度より繰越	578,168	会費振込手数料	45,910
会費入金	1,588,000	テント購入	198,450
寄付（26年卒同期会）	19,200	号令台購入	168,000
		通信費	12,150
		雑費	27,865
		残高	1,732,993
計	2,185,368	計	2,185,368